

現代スポーツを考える

— スポーツ選手の入れ墨が影響するもの —

岡 部 修 一

奈良産業大学地域公共学総合研究所

Essay on Sports Today: The Influence of Tattooed Athletes

Shuichi Okabe

Research institute of Public Affairs, Nara Sangyo University

昨今、スポーツの世界大会において身体に入れ墨をした外国人スポーツ選手が頻繁に見受けられる。一昨年のサッカーワールドカップ南アフリカ大会はじめ今夏のロンドンオリンピックでも、選手たちの身体の入れ墨が中継画面を通して、数多く露出していた。折しも日本の社会ではファッションの一環として、気軽に入れ墨を入れる風潮が起こっている。外国人スポーツ選手における入れ墨の流行が、日本の社会やスポーツ文化に与える影響について考える。

キーワード：スポーツ選手、入れ墨、タトゥー、スポーツの影響

1. はじめに

第30回夏季オリンピックのロンドン大会は、世界204の国と地域から約1万1千人が参加し、2012年7月25日から8月12日までの19日間（開会式前にサッカーの試合を実施）にわたって、26競技のべ302種目が実施された。一部競技で審判をめぐる問題や無気力試合による失格処分、観客入場をめぐるトラブルなど幾つかの問題はあったが、大会運営上最も懸念されたテロ事件も起こることなく、ほぼ成功裡に終了した。

日本が近代オリンピックに初参加してから100年目にあたる今大会、選手293名（男子137名、女子156名）、役員221名の計514名を派遣した日本選手団は連日熱戦を繰り広げ、史上最多となる38個のメダルを獲得、日本全国に歓喜と熱狂の渦を巻き起こした。卓球、バドミントン、サッカー、アーチェリー、ウエイトリフティングなどの女子が史上初、バレーボール女子は28年ぶり、ボクシングのミドル、バンタム2階級が44年ぶりなど、オリンピック史上初めてや久しぶりの復活となるメダル獲得が相次いだ。また競泳は金メダルこそ獲得できなかったが、戦後最多となる11個のメダルを獲得、最終日には400m

岡部 修一 〒636-8503 生駒郡三郷町立野北3-12-1 奈良産業大学地域公共学総合研究所

メドレーリレーにおいて男女ともメダル獲得を果たし、数々の歴史的記録と記憶の残る大会となった。

今大会、日本勢躍進の中で注目されたのは「団結と絆」そして「女子選手の強さ」だった。選手たちのコメントには、サポートしてくれた周囲への感謝と仲間に対する信頼感が多く語られていた。そして史上初となるメダル獲得の種目がすべて女子であったこと、3連覇の偉業二人を含む女子レスリング55kg、63kg、48kg級の金メダル、不振に終わった柔道唯一の金メダルが女子57kg級、そして団体競技での女子サッカー、女子バレーボールが団結力の強さに基づく見事なチームワークを示しメダル獲得するなど、過去にみられないほど女子選手の活躍が顕著であった。

スポーツを観て感動を覚える人は大勢いる。ロンドンオリンピックでも日本選手たちの活躍や躍進に大いなる歓喜や深い感動を与えられ、励みや勇気をもたらしたなど、4年に一度の世界最大規模を誇るスポーツの祭典を大いに満喫した日本人は多いのではないであろうか。

しかし、オリンピック中継で非常に気になることがあった。サッカー、陸上競技、バスケットボールなどで、入れ墨をした外国人選手が目立ったことである。入れ墨の部位や大きさ、デザインはさまざまであり、もちろんすべての競技や選手を観たわけではないが、男女を問わず入れ墨を入れた選手が決して少数ではないように感じた。外国人スポーツ選手の間に入れ墨が流行している風潮は、日本でスポーツ選手に憧れる青少年に対する影響を思えば、一抹の危惧を感じざるを得ない。スポーツ選手の入れ墨について考察する。

2. 入れ墨について

2.1 入れ墨の起源

入れ墨は人類史上かなり古くから存在したと考えられており、古代の人々の皮膚にその身体装飾としての痕跡が残されている。1991年アルプスのエッツィ渓谷の氷河において男性のミイラが発見された。アイスマンと名付けられたそのミイラはおよそ5300年前の人間とみられ、彼の背中には入れ墨のようなラインで描かれた単純な幾何学模様があった。また1993年シベリアのアルタイ山脈地方ウコク高原の永久凍土で、女性のミイラ1体と男性ミイラ2体が発見された。男性たちは女性と同時に埋葬されたと思われるため、女性が身分の高い王女、男性たちは護衛戦士ではないかと考えられている。3体とも腕や肩に施された鮮やかな入れ墨が、ほぼ完全な形で残っていた¹⁾。

中国の歴史書『三国志』の中の『魏志倭人伝』は3世紀（弥生時代）の倭人（日本列島の住民）について記したもので「男子皆黥面文身」という一文が記されている。黥面とは顔に、文身とは身体に入れ墨を施すことを意味しており、当時の倭人男性が身体に入れ墨を入れていたことを示している。これは確認されている日本最古の入れ墨の記録とされる¹⁾。

2.2 個体識別や刑罰としての入れ墨

一度入れると容易に消えない入れ墨は、古代から現代まで身分・所属などを示す個体識別の手段として用いられて来た。日本の戦国時代には、斬首され身元不明死体として野晒しになるおそれのある雑兵

が自らの氏名などを指に入れ墨したとされ、また漁師や木場の川並鳶が事故で水死した際の身元判別のため入れ墨を入れることもあった。また戦時中の強制収容所や、かつての欧米の刑務所では、入所者や受刑者の管理用として入れ墨による識別が行われていた¹⁾。

刑罰としての入れ墨には、古くから中国に存在した五刑の墨（ほく）・黥（げい）があり、これは罪人の顔や腕に入れ墨を入れるものであるが、最高刑が死刑である五刑の中では最も軽い刑罰であった。

日本でも江戸時代、罪人に対して左上腕部に1本ないし2本の線を一周させる入れ墨を入れていた。入れ墨の様子は地域によって異なっており、額へ段階的に「一」「ナ」「大」「犬」という字を入れ墨し、五度目は死罪となる地方もあった¹⁾。

2.3 反社会的サインとしての入れ墨

アメリカでは1960年代後半、ヒッピー文化の中に入れ墨が取り入れられた。ヒッピー文化は、長引くベトナム戦争への厭戦、反戦の機運をきっかけに既成の社会概念、価値基準を拒否し、魂の自由な開放を唱えて若者たちの間で広まった。伝統的な社会や制度、キリスト教的価値感を否定したことで、ドラッグ（麻薬）への依存、東洋の思想と宗教に感化されたカルト教団への帰依など、一部では反社会的な行為や活動が含まれていた。ヒッピーの入れ墨は、ドラッグとの関連からオカルト的な凶案やヒンドゥー教やチベット教に由来する梵字などのデザインが好まれていた²⁾。

反社会的勢力、組織の構成員であることの象徴として、日本の暴力団、中国系の幫、ロシアンマフィア、アメリカの白人至上主義団体などでは構成員の多くが入れ墨をしている。日本の暴力団関係者が入れ墨をする理由として、社会からの離脱と帰属組織への忠誠、痛みを耐え消すことのできない刻印を背負う覚悟、また周囲への威圧などが挙げられる¹⁾。

反社会的組織ではないが、風俗業に従事する女性が性的装飾として入れ墨を入れる習慣が世界各国に存在する。あるいは性的パートナーとの関係性を明示するため入れ墨を入れる場合もある¹⁾。

このように入れ墨には、非合法や反社会的な行為、活動の象徴として、いわば社会からのドロップアウトやアウトローを顕示する意味合いが強い。

2.4 ファッションとしての入れ墨

近年の日本では、ファッションや個性の主張という意味合いの入れ墨が流行している。

有名なミュージシャンや芸能人が「愛する者との同一化」の証として妻や夫、子どもの名前を入れ墨し、それがメディアから発信されたことで、感化された一般人が恋人の名前や何らかの自己表現の入れ墨を入れる流行が生まれた。いわば「入れ墨のファッション化」である。しかし社会の中で入れ墨が容認されているとは言い難い。原則的に浴場、サウナ、プールなど肌の露出度の多い公共の場所では「入れ墨のある方お断り」と告知され、一部の海水浴場では砂浜への立ち入りを禁止している。そして就職活動の際、入れ墨があると判明したような場合は、不利な状況に陥ることも覚悟しておく必要があり、受け入れられる就職先（職種）は限られることになる。

また最近、大阪市長が市職員への一斉アンケート調査を行い、入れ墨のある職員は市民の目につかない部署への異動発令や職種によって処分もありうると述べて論議をよんだ。驚いたのは市立学校教職員

にごく一部、入れ墨をした者がいたことである。個人の自由と職業的規範の線引きは難しい問題ではあるが、教育現場である学校教職員に入れ墨はふさわしくない。入れ墨を愛好する人々は、個人の権利や表現の自由を声高に叫び、入れ墨の反社会性ばかり指弾する世間の見方に異を唱える。しかし現在の日本で、入れ墨が反社会的な象徴とみなされているのは厳然たる事実である。節度とモラルを守った上での自由であることを理解すべきである。

3. スポーツ選手のタトゥー

今夏のロンドンオリンピック以前にも、2年前のサッカーワールドカップ南アフリカ大会で、選手たちの身体に入れられた多くの入れ墨を目にした。また人気のあるK-1などの格闘技でも、入れ墨を入れた選手は多い。

サッカーの2010年ワールドカップ南アフリカ大会では、とくにヨーロッパや南米諸国の代表選手が、半袖や袖なしユニフォームから露出した腕に派手な図柄の入れ墨を入れているのが頻繁に見られた。かつてのイングランド代表のスター、デヴィット・ベッカム David Robert Joseph Beckham 選手も今や腕や腹部、さらに背中にも、大胆な図柄の入れ墨を施している。

フットボールジャーナリストの小谷泰介氏は、ブログ「小谷泰介の地球はフットボール」の中で³⁾、ヴェルダー・ブレーメンでの日本人鍼灸トレーナーの治療室やロッカールームにおいて、上半身裸になった多くの選手を見た結果、ブンデスリーガの選手のうち約四分の一が何かしらの入れ墨を入れていると述べている。さらに、古今東西を問わず戦地に赴く戦士や、ボクサー、プロレスラーなどの格闘家に入れ墨を入れる傾向が多く見られることから、ピッチ上で極めて過酷な戦いを強いられるフットボール選手が入れ墨を入れるのも納得できる現象であり、彼らがピッチで戦う男として入れ墨を求めている側面を感じると述べている。しかし小谷氏の親しいドイツ人コーチは、フットボール選手の入れ墨は1990年代に入ってからのもので自分の現役時代にはなかったこと、そして近年の入れ墨をしたフットボール選手の傾向は一種のファッションまたブームと考えていると語った。ブンデスリーガのフットボール選手の入れ墨が昔からではなく歴史が浅いことを考えると、戦う男の心理状況が影響を及ぼしているとの自説が正しいとはいえないとも述べている。

そして有望な若手選手がある日突然、色鮮やかな大きな錦鯉の入れ墨を左腕にしてやってきたのを見て、いったい何が彼をそのような刺青に駆り立てるのか理解に苦しんだとある。目立つ部位への大きく派手な入れ墨、これに戸惑いを覚えるというのは、日本人として偽らざる心境であろう。最近ではJリーガーでも入れ墨をした選手を少なからず見かけるようになったが、その入れ墨は、例えばウェアで隠れる部位であったり、露出する部位の場合は派手で目立つものではなく小さめの図柄や文字だったりする。一方、外国人選手の場合、露出の多い部位に派手で大きな図柄の入れ墨を堂々と入れている。ワールドカップでの、外国人選手の肩から腕全面に入れられた入れ墨には不快感を覚えるほどで、それはまるで時代劇「遠山の金さん」の桜吹雪に勝るとも劣らぬ仰々しさであった。遠山の金さんの桜吹雪は創作であり、大衆演劇やテレビドラマの演出上、華やかで目立つ派手なものとの必然があった。しかしスポー

ツ選手の派手な入れ墨には必要性も必然性も感じられない。日本人選手の場合、入れ墨が刑罰や悪い意味の個体識別に用いられた経緯があり、とくに派手な図柄のものには任侠の世界、反社会勢力のイメージがつきまとうため、ためらいや抵抗感があって、あまり仰々しいものにはならないのではないかと。しかし外国人選手はそのような感覚が希薄で、例えば奇抜で派手な髪形や服装を好むと同様の、派手で目立つ図柄の入れ墨を好むのであろう。ファッションとして入れ墨をとらえるならば、服装や身だしなみが十人十色、好みが千差万別のように、入れ墨についてもさまざまな考えを持ち合わせていることになる。

スポーツ選手の入れ墨がいつ頃から始まったのかは、はっきりしていない。かつては格闘技系の選手など一部に限られていた入れ墨が、昨今は一般のスポーツ選手しかも男女を問わず広がりを見せている。極限まで肉体と精神を鍛えぬくスポーツ選手が自らの強さの誇示のため、あるいはアイデンティティやメッセージを表現する方法としてだけでなく、単に身体装飾としてのファッション感覚で入れ墨を入れたその姿が、メディア報道を通して全世界へ発信されている。

4. 入れ墨と「タトゥー」

かつて任侠や反社会勢力など特殊な世界の慣習であった入れ墨が、昨今は一般人の間でも愛好されるようになった。タトゥー専門の月刊誌もありデザイン集などが多く出版されていることを考えれば、入れ墨が現代社会でファッション領域の装飾のひとつとして扱われ、マイノリティながら根付きつつあるのは確かである。

入れ墨を入れた人々は、その言葉のもつ邪悪なイメージや社会への後ろめたさからなのか、英語に置き換え「タトゥー Tattoo」と呼んでいる。そして「入れ墨は怖くてヤバイけど、タトゥーはファッションだから大丈夫」と表現をすり替えて社会の厳しい視線をかわそうとしている。しかし依然日本の社会で入れ墨に対する見方は厳しい。たとえ呼び名をタトゥーと変えようとも入れ墨であることに変わりはなく、多くの人々が嫌悪感や不快感を抱くのが現実である。前述したように、公衆の集う場所で肌の露出機会の多いプール、サウナ、ゴルフ場の浴場などへの入場禁止やスポーツジムの入会を断られたり、就職や結婚などで不利になることがあり、肌の下に顔料のせいで病院でMRI検査などができないこともある⁴⁾。

タトゥーと呼び換えての入れ墨をしている人間は、厳しい日本社会の入れ墨に対する見方は偏見や差別であり、外国社会では容認されているのに日本社会は考えが古く偏狭だという。

しかし社会通念やルール、倫理的感覚というものは、長い歴史的経緯の末に形成される。その内容は国や民族ごと独自性を持ち、固有なもので、その概念に基づいて社会秩序は構築されているのだ。日本では入れ墨に対し、大多数の人々が嫌悪感、不快感、威圧感、恐怖感をいだき、非合法ではないが社会通念上、容認されないタブーな存在である。

元来、反社会勢力や反体制の世界での入れ墨には、一般社会からの離脱と帰属組織への忠誠を示し、周囲を威圧するなどの意味合いがあり、彼らは一般社会に背を向けることによって被る不利益や不遇を

甘んじて受け入れる矜持があったはずである。表現として適切ではないが、ある意味アウトローとしての気概と心意気をもっていったといえよう。

しかし、ファッションとして入れ墨を入れる現代人の多くは、そういった覚悟も気概もなく、ただ単に「カッコいい」「個性をみせる」「願掛け」「愛の証」等々、実にお気楽な気持ちである。そして人々から嫌悪感や不快感といった冷徹な視線を浴び、公共の場で同等に処遇されず疎外感を味わわされることによって驚き、うろたえ、怒り、その挙句「不当だ」「偏見だ」「日本は古い」など不満と文句をいう。しかしそれは単なる甘えに過ぎず、個人の自由だから容認しろというのは身勝手な論理に過ぎない。たとえ入れ墨をタトゥーと呼び換えようとも、反社会性のイメージが定着した入れ墨が日本社会で容認される可能性は、今後も極めて少ないであろう。本人の意思とは無関係に、入れ墨を入れること＝アウトローと世間は受けとめる。入れ墨を入れたいならば、アウトローとして社会通念に堂々と背を向け、偏見や不遇な状況をも平然と受け入れるだけの覚悟を持たねばならない。アウトローとして生きるのは相当な覚悟と自立した強さが必要で、厳しいイバラの道である。その覚悟がなければ入るべき世界ではない。

最近の日本は、TPOをわきまえぬ勝手気ままな行動を個人の自由や個性として正当化しようとし、法律や社会規範の遵守、公共の場でのマナーやモラルについて、ないがしろにする傾向がみられる。その結果、自分勝手に無責任な振る舞い、責任逃れの風潮が蔓延している。交通違反を犯し逃走する、迷惑駐車および駐輪、車や單車、自転車の危険運転、ゴミや廃棄物のポイ捨てや放置、インターネット上で匿名による罵詈雑言、公共の場で我が子が傍若無人に振舞っても知らん顔で注意すれば逆ギレする親、虐待やネグレクトを行う親、あげればキリがない。

例えば、入れ墨を外国同様に容認せよというなら、犯罪や反社会的行為あるいはマナーやモラル違反に対して、日本より厳しく法律適用し対処する外国のやり方も受け入れるべきである。社会通念に対して自分たちが好き勝手に振る舞えるような変革は求めるが、法律はじめマナーやモラル違反に対する規制強化は認めたくない、これは明らかに自由と権利のはき違えだ。外国の慣習や文化を過度に受け入れる必要はなく、大多数の人々が変革の必要性を感じていないことは、日本は日本独自の社会通念、規範を堅持していくべきである。

5. 社会に容認された茶髪

この二十年余りの歳月において、身だしなみで社会的容認が劇的に変化したのは、茶髪であろう。

現在、茶髪は男女を問わず日本人の間に定着している。むろんあまりに奇抜な色目や髪形までは受け入れられていないが、かつて社会に反抗的な若者集団の象徴のようにとらえられていた茶髪が、今やファッションとしての地位を確立している。

茶髪に関しては苦い記憶がある。大学スポーツに茶髪が登場したのは、元号が平成に変わり数年が経過した頃と記憶している。私は当時大学男子バレーボール部監督を務めていた。平成元年の監督就任当時、チームは関西4部リーグに所属しており、その後3部リーグ、2部リーグへと昇格していく。その

頃、関西大学リーグの所属チームの中に、茶髪の選手は皆無であった。

スポーツ推薦制度によって能力をもった優秀な選手も揃い、平成5年には1部リーグ昇格を目指すポジションへとステージをあげた。ところがこの頃に、一般の大学生の間に茶髪が増え始め、大学スポーツ界でも少数ながら見かけるようになった。スポーツ推薦で入学した選手には、全国大会出場の強豪高校出身者もあり、彼らの大部分は高校時代、バレーボール部伝統として坊主頭にさせられていた。大学生となって坊主頭から解放され、伸ばした髪にオシャレをしたいのは、あの年代ならではの素直な欲求であり、坊主頭を強制させられていた反動もあったに違いない。そこに茶髪という髪のオシャレ上に新たなコンセプトが持ち込まれた。彼らの髪の毛が茶髪に染まり始めるのに時間はかからなかった。

しかし私は選手たちに、茶髪禁止令を出した。理由は「1部リーグ昇格をめざすには、チャラチャラした格好はふさわしくない」というものであった。平成5年当時2部リーグ以下のチームには茶髪の選手がいたが、関西1部リーグ所属チームである大阪商業大学、天理大学、立命館大学、同志社大学などには茶髪の選手は一人もいなかった。すなわち本気でバレーボールに取り組む選手に茶髪はありえないとの考えに基づき、選手たちの欲求を抑え込んでしまったのだ。

ところが同年暮れ、全日本大学選手権大会に出場した際、衝撃を受けた。関東1部リーグ上位の順天堂大学に茶髪の選手が何人もいたのである。そして関東2部リーグにも多数の茶髪選手がいた。当時の大学バレーボールの勢力分布は東高西低で、関西1部リーグのチームが関東の1部リーグばかりか、関東2部や3部リーグにまで敗れる時代であった。黒髪が茶髪に凌駕される、その厳然たる現実を目の当たりにし、茶髪であることはバレーボールの技量に関係がないと感じた選手たちは、ほどなく茶髪解禁の要望を提案してきた。しかし私は再び認めなかった。

「世間はまだ茶髪に対して寛容とはいえない。茶髪=チャラチャラしていると偏見をもつ大人も多い。企業バレーボールチームに合宿でお世話になる我々が、印象が悪くなる可能性のある茶髪はやめよう。」

「就職活動に茶髪で行くか?黒髪に戻して行くだらう。それはおまえたち自身、気持ちの奥底で茶髪は印象が悪くないと感じているからで、ならばバレーボールにも持ち込むな」

自分自身が、茶髪=チャラチャラしていると偏見をもつ大人であることはわかっていた。もっともらしい理屈をつけ監督の権限を盾に説得していたに過ぎなかった。

その後およそ5年間、茶髪禁止令をめぐって選手たちとのせめぎ合いが続き、ついに平成10年にあまり奇抜な色にはしないとの条件をつけて茶髪を解禁した。すでに関西の大学バレーボール界は茶髪の選手が大多数を占めるようになり、未だ禁止のチームはごく少数になっていた。

そのとき解禁を認めたのは、創部以来最強のチームであり、技術的にも優れ、人間的にも信頼できる人材が多く、その彼らが「派手でない茶髪は認めてほしい」と望んだことで、外見(茶髪)と中身(人間性)は一致せず、偏見をもつべきではないとの思いに至った結果である。

その後、社会の中で茶髪はすっかり定着し、奇抜なものでなければ容認される時代となった。世の中では男女を問わず、また年齢層も幅広くファッションとしての茶髪を楽しんでいる。スポーツ選手も、女子選手の大多数は茶髪であり、男子でも種目により違いはあるものの、茶髪の選手が多くなった。自分が茶髪にすることは今後ともあり得ないが、私自身二十有余年をかけて茶髪の文化を容認できたのは確かである。

ただ私自身の思いの中には、日本で花盛りの茶髪文化もそれは単に「隣の芝生は青く見える」だけのことと考えている。私は1982年から1985年にかけての3年間、青年海外協力隊員として北アフリカのモロッコ王国に赴任していた。そのときに聞いたモロッコ人女性の印象的な言葉が忘れられない。彼女は栗色の天然パーマで、ぱっちりした目と高く整った鼻筋の持ち主で、いわゆる彫が深く目鼻立ちのはっきりした、かなりの美貌のアラブ女性であった。その彼女が「日本人女性の黒いストレートの髪は世界で一番美しく、とても憧れている」と語った。縮れ毛であればと真っ直ぐな髪が、茶系の髪色にとっては黒髪が美しく見えてあこがれる、まさに無いものねだりである。しかし日本人女性はわざわざ黒髪を茶髪にし、ストレートの髪にパーマをかけてお洒落するのである。不思議でもったいない気持ちがしてならない。

6. まとめ

二十年近い歳月をかけ、ある程度日本社会に容認された茶髪とは違い、任侠の世界、反社会勢力などを連想させマイナスイメージのつきまとう入れ墨が、日本社会に受け入れられることは極めて難しい。

体に一度入れると容易には消せず、完全に元通りの肌にはならないことも嫌忌される理由のひとつであろう。人の精神や心持ち、主義主張などは年月とともに変わりゆく。社会生活の上でも職種、年齢、立場などに応じた身だしなみが求められよう。髪型や服装は、状況に合わせて変えることもできる。タトゥーもどきの身体装飾を望むならシールという方法もある。それでもなお、反社会的印象が強く、消せない入れ墨にこだわるのだろうか。

小谷泰介氏のブログで、あるドイツ人選手が「ピアスや小さな入れ墨なら構わないが、上半身全体に入れたら、後々消すわけにもいかず後悔するのではないかと語ったという³⁾。消せないような入れ墨は後悔するかもしれないという感覚は、日本人だけでなく外国人もまた持ち合わせている。

アメリカでもファッション感覚で入れ墨を入れる19歳から29歳までの男女が急増しているという。だが、アメリカ社会として入れ墨を全面的に容認しているわけではなく、最近まで軍隊への入隊希望者に入れ墨があれば失格とされていたし、規律が厳しいことで有名なMLB（大リーグ野球）名門強豪チームのニューヨークヤンキースは、原則的に「長髪、不精ヒゲ、入れ墨」を禁止している。

不利益や疎外感を受ける入れ墨は、決して安易に入れるべきではない。しかし昨今のスポーツ選手における入れ墨流行りの風潮は、日本の青少年に対する影響力を考えると憂慮すべきことである。青少年たちは憧れのスポーツ選手の考え方や発言に共感し、所作や髪形、習慣などを模倣する。外国人選手のような派手で目立つものを避け、日本人選手のように小さなデザインのタトゥーを着衣で隠れる部位に入れるならいいだろうと安直に入れ墨に手を出すことも考えられる。そして人と違う個性や自己顕示を求めていけば、やがて派手なものへとエスカレートしていくかもしれない。タトゥーと言い換えたところで所詮は入れ墨であり、特殊な限定された世界でしか受け入れられないのである。例えば自らの腕一本で生きる職人など職業選択が極めて狭められることをも覚悟する必要がある。若気の至りという表現は極めて古典的ではあるが、一時の浅薄な憧れや短慮な思い込みによって入れ墨を入れてしまえば、自

ら人生に手枷足枷をはめることになる。

自由の在り様をはきちがえた日本人が多くなった昨今、青少年に対して日本社会で入れ墨が容認されないことを理解させるのは難しいことであろう。しかし、ファッション化したタトゥーという安易な風潮に感化され、分別もつかぬまま興味本位で入れ墨に手を出すことのないよう、スポーツ現場だけでなく社会全体の問題として社会的発信と教育的指導を考えなければならない。

引用文献

- 1) [http://ja.wikipedia.org/wiki/ 入れ墨](http://ja.wikipedia.org/wiki/入れ墨)
- 2) [http://ja.wikipedia.org/wiki/ ヒッピー](http://ja.wikipedia.org/wiki/ヒッピー)
- 3) <http://www.actiblog.com/kotani/261416> 小谷泰介の地球はフットボール
- 4) <http://tatoo.jp.org/tatoo-column/demerit> タトゥーデザインズ タトゥー・刺青を入れるデメリット

参考文献

- 小野友道 (2010) いれずみの文化誌. 河出書房新社.

